

[58] 哲學年報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2344375>

出版情報：哲學年報. 58, 1999-03-10. Faculty of Letters, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



山崎 庸佑 教授

山崎庸佑教授 略年譜

昭和九年一月九日 高知県香美郡野市町西野六八四番地に生れる

本籍 福岡県福岡市東区和白丘四丁目二五番

現住所 福岡県福岡市東区和白丘四丁目二五番の三

学歴

昭和三十三年三月二八日 東京大学文学部哲学科卒業

昭和三十三年四月一日 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程入学

昭和三十五年三月二九日 同上修了

昭和三十五年四月一日 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程に進学

昭和三十八年三月二日 所定の単位を修得の上、同上を退学

職歴

昭和三十八年四月一日 東京大学文学部助手

昭和四二年四月一日 山形大学文理学部助教

昭和四二年六月一日 山形大学教養部助教

昭和四六年三月三十一日まで同文理学部助教を併任

昭和四三年四月一日 山形大学人文学部助教を昭和四九年三月三十一日まで併任

昭和四九年 四月一日 九州大学文学部助教、大学院文学研究科担当

昭和五七年 四月一日 九州大学文学部教授、大学院文学研究科指導教官

昭和五八年 四月一日 昭和五九年三月三十一日まで学生部参与

昭和五九年 三月三十一日 昭和六〇年一月二十八日までドイツ連邦共和国、スイス、ベルギー、フランスに渡航

(文部省在外研究員)

平成一〇年 三月三十一日 定年により九州大学教授を退官

平成一〇年 四月一日 日本大学文理学部教授

平成一〇年 四月二十四日 九州大学名誉教授

学位

昭和五六年一〇月一五日 文学博士(九州大学)

賞

昭和五三年一月一日 哲学奨励山崎賞受賞

学界ならびに社会における活動

昭和四九年 四月 一日より平成一〇年 三月 三二日

九州大学哲学会委員および編集委員

昭和五一年 二月 一日より現在まで

西日本哲学会委員

昭和五八年 五月 一日より現在まで

日本現象学会委員、その間二年にわたり編集委員を兼ねる

昭和六三年 五月 一日より平成元年 四月 三二日

日本哲学会編集委員

平成二年 五月 一日より平成七年 四月 三二日

日本哲学会委員

平成五年 一月 二日より平成六年 一月 二日

学術審議会専門委員(科学研究費分科会)

平成五年 一月 三二日より現在まで

日本ショーペンハウアー協会委員

平成五年 四月 一日より平成七年 三月 一日

日本学術振興会、特別研究員等審査会委員

平成八年 二月 七日より平成一〇年 二月 五日

西日本哲学会委員長

平成一二年 四月 一日より

日本ショーペンハウアー協会会長

I 著書

1 ニーチェと現代の哲学

理想社

昭和四五年七月三〇日

単

2 現象学の展開

新曜社

昭和四九年一月一〇日

単

3 ニーチェ(人類の知的遺産五四)

講談社

昭和五三年六月二〇日

単

4 現象学と歴史の基礎論

新曜社

昭和五五年六月五日

単

5 生きる根拠の哲学(レグルス文庫一三五)

第三文明社

昭和五六年六月一〇日

単

6 超越論哲学

新曜社

平成元年一月三十日

単

7 ニーチェ(講談社学術文庫二二二〇)

講談社

平成八年一月一〇日

単

8 自己の研究

北樹出版

平成一〇年四月一〇日

単

II 編著書

1 現象学から歴史哲学へ

河出書房新社

昭和五六年五月二五日

2 カント超越論哲学の再検討

北樹出版

昭和六二年三月五日

III 学術論文

1 現象学とサルトル哲学

東大哲学会『哲学雑誌』

昭三六年九月三〇日

単

2 ニーチェとハイデッガー

哲学雑誌

昭三八年一〇月二五日

単

3 過去の救済

理想

昭三九年七月一日

単

4 快癒の弁証法

駒沢大文学部紀要

昭四〇年三月一五日

単

5 実存哲学

高文社刊『哲学』

昭四〇年二月二〇日

単

6 認識と懐疑

日本哲学会『哲学』

昭四一年三月三一日

単

7 実存哲学と「認識」の問題

哲学雑誌

昭四二年一〇月三〇日

単

8 悲劇的なもの

理想

昭四三年五月一日

単

9 言語行動の現象学

実存主義

昭四四年二月二〇日

単

10 意志・生命・実存

学文社刊『現代の哲学』

昭四五年一〇月三一日

単

- | | | | | |
|----|-------------------------------|--------------------|------------|---|
| 11 | 世界と人間 | 哲学雑誌 | 昭四六年一〇月三〇日 | 単 |
| 12 | 近代的知性の崩壊 | 新曜社刊『知性の歴史』 | 昭四七年一月二〇日 | 単 |
| 13 | 他我の問題 | 山形大学紀要 | 昭四八年一月二〇日 | 単 |
| 14 | 近代人の美意識 | 学文社刊『美の哲学』 | 昭四八年四月一〇日 | 単 |
| 15 | 不安と孤独 | 学文社刊『哲学の道』 | 昭四八年五月一日 | 単 |
| 16 | 戦後のわが国におけるニーチェ
研究に関する批判的展望 | 実存主義 | 昭四八年六月二〇日 | 単 |
| 17 | 身心問題 | 九州大学哲学会
『哲学論文集』 | 昭四九年九月二日 | 単 |
| 18 | 歴史哲学序説 | 九州大学文学部
『哲学年報』 | 昭五〇年三月二日 | 単 |
| 19 | 体系小考 | 哲学雑誌 | 昭五〇年一〇月三〇日 | 単 |
| 20 | ニーチェと現象学 | 青土社刊『現代思想』 | 昭五一年一月一日 | 単 |
| 21 | 現象学の発展 | 現代思想 | 昭五一年二月一日 | 単 |
| 22 | ヘーゲルにおける歴史的・精神的
世界の成立 | 哲学論文集 | 昭五三年九月二〇日 | 単 |
| 23 | ヘーゲル歴史哲学にかんする若
干のコメント | 現代思想 | 昭五三年一〇月二五日 | 単 |
| 24 | 実存哲学 | 河出書房新社刊
『哲学大系』 | 昭五四年六月二五日 | 単 |
| 25 | 現代の歴史理論とニーチェ再論 | 理想 | 昭五四年一〇月一日 | 単 |

- 26 歴史意識と歴史解釈の歴史性
哲学年報
昭五五年三月三一日 単
- 27 人間存在の社会性
弘文堂刊『講座 現象学二』
昭五五年七月一〇日 単
- 28 超越論的对象と物自体(1)
哲学年報
昭五七年三月三一日 単
- 29 超越論的对象と物自体(2)
哲学論文集
昭五七年九月二〇日 単
- 30 経験の分析と哲学
哲学年報
昭五八年一月三一日 単
- 31 近代ニヒリズムの意味するもの
九大出版会刊
『生きがいの探求』
昭五八年四月二〇日 単
- 32 歴史的行為の分析
勁草書房刊『行為の構造』
昭五八年四月三〇日 単
- 33 美的経験と理念
哲学年報
昭五九年二月一五日 単
- 34 遊び
「新」岩波講座『哲学』
昭六一年一月一〇日 単
- 35 対他的・実践的経験と本源的共存
哲学年報
昭六一年二月二八日 単
- 36 本源的共存存在と日常性批判
哲学年報
昭六二年二月二八日 単
- 37 Welthorizont und gegenseitiges Anerkennen (Phänomenologie der Praxis im Dialog zwischen Japan und den Westen, Königshausen & Neumann, 1989)
西ドイツの出版社による独文の論文
単
- 38 死と自己
理想
平元年三月三一日 単
- 39 自己と時間
日本現象学会
『現象学年報』
平二年三月三一日 単
- 40 Selbst und Zeit
哲学論文集
平二年九月三〇日 単
- 41 超越論哲学と自己の問題
哲学年報
平三年三月三〇日 単

42	観念論論駁	哲学年報	平四年三月三〇日	単	
43	Self and Time (Japanese and Western Phenomenology, Kluwer Academic Publishers, 1993)			単	オランダの出版社による英文の論文
44	改稿・死と自」	哲学年報	平五年三月二五日	単	
45	他なる内面性と無	哲学年報	平六年三月二五日	単	
46	自己の存在	哲学年報	平七年三月二〇日	単	
47	物自体と自由意志	哲学書房刊 『ショーペンハウアー研究』二	平七年一月一五日	単	
48	自然と作為	創文社刊 『自然法と宗教Ⅰ』	平一〇年一月一五日	単	
49	形相と顔	日本大学哲学会 『精神科学』	平一〇年二月三〇日	単	

IV 学会発表(口頭発表)

意志の困却とその超克	東大哲学会	昭三七年二月三日	単	
弁証法の冒険	東大哲学会	昭四三年二月二日	単	
身心結合の問題	東大哲学会	昭四七年二月五日	単	
歴史の土壌	西日本哲学会	昭四九年二月五日	単	
超越論的対象と物自体	東大哲学会	昭五六年一月七日	単	
歴史と現象学	日本現象学会	昭五八年五月三〇日	単	ただし、シンポジウムの提題者として発表

Welthorizont und gegenseitiges Anerkennen The First International Phenomenological Conference in Japan

昭和三十二年九月八日

单

Self and Time The Japanese—American Joint Seminar on Phenomenology

平成三年一〇月二五日

单